

第五章 數詞

數詞

物事の數量又は順序を表す體言を數詞と云ひます。分けて云ふときには、數量を表すものを原數詞と云ひ、順序を表すものを序數詞と云ひます。

例へば、「一振の刀」「掛物二幅」の「一振」「二幅」の如きは物事の數量を申しますから原數詞でありまして、「一等」の成績「帝國文庫の第二編」の「一等」「第二編」は物事の順序を申しますから序數詞であります。

固有の原數詞

總べて數詞には我が國固有のものと、支那から傳來したものと此の二通あります。我が國固有の數詞で今日普通に用ゐられますものは、殆んど「ひとつ」「から」とを「までの數を示すに過ぎないのであります」が、支那から傳來しましたものは大小總べての數を示します。固有の數詞で十以上の數を示しますものは、「はたち」で二十歳を表し、「はつか」で二十日、「みそか」で三十日を表すばかりであります。併し「はたち」は今日でこそ年齢を示すに用ゐられますけれども、古くは伊勢物語に「比叡の山をはたちばかり重ねたらんほどして……」とあります如く、二十と云ふ普通の數量を示すに用ゐられたの

てあります。さうして三十以上は「みそぢ」「よそぢ」「むそぢ」「ななそぢ」「やそぢ」この「そぢ」などと云ひました。「みそぢ」「よそぢ」などの「そ」は「十」の意で、尙「いくそ（幾十）」などとも用ゐましたが、苗字に「十河」などと用ゐる外には語の上に用ゐた例がありません。この外十位を示すものの中には「五十」と云ふ特別な語もありますが、小兒が生れて五十日目の祝を「い、か、五十日」と申します外には「い、す、ず、が、は（五十鈴川）」「い、が、ら、し（五十嵐）」などと云ふ少數の固有名詞に用ゐられるばかりであります。それから十位の端數を示しまするには間に「あ、ま、り」又は其の「あ」を省いた「ま、り」を挿んで、とをあまり一つはたちあまり二つ「みそぢまり三つ」などと云つたのであります。又十位以上を表はす語もありました。それは「も、い、ち（百）」「い、ほ、ち、い、ほ、つ（五百）」「や、ほ、ち（八百）」「ち、ぢ（千）」「よ、ろ、づ（萬）」などであります。しかし此等は時に正確な數を示すに用ゐることもありませんたけれども、多くは「も、い、の、官^{ツカサ}」「ち、ぢの社^{ツカサ}」「や、ほ、神」「よ、ろ、づの事^{ツカサ}」などの如く、唯多數を示すに用ゐられたのであります。

「ひとつ」「ふたつ」「乃至」「い、ほ、つ」「よ、ろ、づ」などの「つ」又は「づ」はたち「みそぢ」「乃至」「も、い、ち」「ちぢ」などの「ち」又は「ぢ」は何れも數詞の一部を作ります所の接尾語であり

まして、もとは同じ語源であります。さうして數詞の數の觀念を表す部分は、其の「つ」「づ」又は「ち」「ぢ」を去つた殘の部分であります。それですからして此等の接尾語の代に他の接尾語を用ゐまして、

人ひとり(人) 太刀ふたこし(腰) 長刀みふり(振)

帶よすぢ(筋) 提灯いつはり(張) 長持むさを棹

平家ないむね(棟)

などのやうにも用ゐられます。此等の接尾語は多く數詞の下に用ゐられるのであります。之で以て物事の種類をも大凡に示すことになつて居ます。例へば前の例の「り」と云ふ接尾語は「人」を示し、「こし」は腰に帶びる刀を示し、「ふり」は一般の刀を示し、「すぢ」は細長いものを示し、「はり」は提灯、弓などの如く張るものを示すのであります。斯の如き接尾語を助數詞と云ひます。

助數詞は英語等にも *one head of cattle, two glasses of wine, three sails of ship* の如く類似のものが全くないてはありませんが、寧ろ例外に屬するものであります。然るに我が國語では「つ」「づ」「ち」「ぢ」其の他多數の助數詞があつて、始めて數詞と云ふものは成り立つのですから、極めて大切な事柄に屬するのであり

ます。之に就いてチエンバレン氏は斯う云ふことを申して居ります。「日本」の數詞は多く助數詞と共に用ゐられるが、其の助數詞は其の關係する名詞の表す物に依つて略、一定して居るから、夫に應じた助數詞を選び損ふと云ふと、丁度佛蘭西語や獨逸語の性を間違へたのと同じ誤の結果を起す。」と申して居ります。併し乍ら日本の助數詞はチエンバレン氏の申すやうに、さうむづかしいものではなくて、略、道理を以て推することが出来ます。例へば矢は細長いものだから「筋」と云ふ助數詞を使ふ。弓は張るものだから「張」と云ふ助數詞を使ふ。家には棟があるから「棟」と云ふ助數詞を使ふと云ふやうに、大體は由る所があるのであります。然るに彼の獨逸語の性などは、自然の性に反いたものが多くて、車(*der Wagen*)が男性、番兵(*die Wache*)が女性、妻(*das Weib*)が中性と言つたやうな風ですから、之を以て我が助數詞と比較するなどは始から間違つて居ると思ふのであります。

助數詞には二つ以上のものが集合したことを示すものがあります。例へば

盃ひとくみ(組) 鴨ふたつがひ(番) 藁いつたば(束) 小袖よかさね(襲)

本數詞

の「くみ」「つがひ」「たば」「かさね」の如きものがそれであります。之を集合助數詞と云ひます。集合助數詞も名詞の表す物に因縁がありまして、用法に一定の習慣があるのであります。

助數詞に對して、専ら數の觀念を表すものを離して云ふときには、之を本數詞と云ひます。例へば「百合ひとかぶ株」「紙みしめ」の「ひと」「み」はそれであります。本數詞は助數詞と組合つて數詞を作り、又は名詞と組合つて「ふた親な草」「みそひと文字」などのやうに熟語の名詞を作るのであります。此の時には間々「ひとつ松」「三つ葉」や「へ雲」などの様に助數詞と一所に組合ふことがあります。斯の如く用ゐられた本數詞又は數詞は名詞を形容するものでありまして、西洋の數形容詞に似た役目を致します。併し西洋のは名詞から獨立し、我が國のは名詞と合して熟語を作るので違ふのであります。尤も「な」「こ」の「も」の如く同じ音を重ねたものに限つて獨立に用ゐられた例外があります。即ち「な」の賢き人ども「こ」の子ら「も」の官の人たちなどはそれであります。又物を連續して數へる時にも「ひ」「ふ」「み」「よ」「いつ」「む」などの如く獨立させて用ゐることがあります。古い例では源氏

物語の空蟬の卷に軒端の萩と云ふ女が碁に負けて、碁盤の隅々を數へる所に「指をかゝめて、とを、はたみそ、よそ、など數ふるさま……」と見えて居ります。以上は我が固有の數詞に就いて申し上げたのでありますが、次に支那から傳來した數詞のことを附けてお話しします。かくの如く我が國にはもとより固有の數詞もあつたのでありますが、支那との交通が漸々と頻繁になるに随つて、更に其の數詞を借用することが起つて來たのであります。傳來の數詞と云ひますのは、「一」「二」「三」「四」……「十」「百」「千」「萬」「億」などのことであります。まして、大小の數を容易く且つ正確に表すことの出來るが爲に、追々に其の勢力を逞くすることになりました。我が固有の數詞は遂に十分な發達を遂げずに了つたのであります。漢語の數詞は「一」を聞いて「十」を知る。などの如く其の儘で用ゐることもありますが、多くは固有の數詞と同じく助數詞と一所に用ゐる、又は名詞と合して用ゐられるのであります。例へば

紙一まい(枚)

書籍二くわん(卷)

證文三つう(通)

歌四しゆ(首)

筆五ほん(本)

墨六ちやう(挺)

硯七めん(面)

椅子八さやく(脚)

人九にん(人)

馬十とう(頭)

鯛十一び(尾)

車十二だい(臺)

船十三さう(艘)

大砲十四もん(門)

家十五けん(軒)

などは助數詞の附いたもの、

書籍一ぶ(部)

半紙二そく(束)

海苔三てふ(帖)

鉛筆三タルス

筆四つゐ(對)

下駄六そく(足)

屏風六さう(双)

洋服七ちやく(着)

などは集合助數詞の附いたもので、

十勇士

三十六歌仙

五戒

六道

などは名詞と合したものの、

一軒家

三本松

などは助數詞と共に名詞と合したものであります。さうして「鳥一羽」「一軒家」「三本松」の如き僅少の例外を除いては、固有の數詞は固有の助數詞又は名詞と一所になり、傳來の數詞は傳來の助數詞と一所になるのであります。序數詞も多くは本數詞と序數詞とが合して成立致します。之に三種あります。即ち(一)固有又は傳來の本數詞・助數詞の合して出來たものに「め目」

序數詞

と云ふ順序を示す助數詞を附けたもの、例へば「ふたつめ」「みつめ」「二軒目」「三杯目」の如きもの、**二**傳來の本數詞又は傳來の本數詞助數詞の合して出來た原數詞に「第」と云ふ順序を示す助數詞を冠せたまもの、例へば「第一」「第二」「第三卷」「第四回」の如きもの、**三**傳來の本數詞に「番」「等」「級」「號」などと云ふ順序を示す助數詞を附けたもの、又は更に「第」と云ふ助數詞を冠せたまもの、例へば「一番」「二等」「三號」「第四級」の如きもので、此の後の場合には其の下に今一つ「め」と云ふ助數詞を附けることもあります。但し時と致しましては「一の鳥居」「二の丸」「三の城戸」「四の巻」などの如く、傳來の本數詞ばかりで順序を示すこともあります。又「四十三年八月十五日」の如く、本數詞が名詞の上に附いたばかりで順序を示すこともあります。

序數詞は原數詞の如く名詞と合して熟語の名詞を作ることがあります。例へば「一番鶏」「三等褒狀」「三號表」「第五高等學校」などの如きもので、かくの如く用ゐた序數詞も矢張名詞を形容して居るのであります。